



経済成長と環境問題

公益財団法人日本植物調節剤研究協会 評議員

一般財団法人 残留農薬研究所 理事長

原田 孝則

18世紀の産業革命以来、欧米先進諸国を中心に工業化が進み著しい経済成長を遂げたが、その裏では産業の発展に伴う大気・水・土壌汚染など様々な環境問題が顕在化し、人類が解決すべき大きな課題として残されている。我が国においても、明治維新により遅れていた産業の近代化が進められ、欧米諸国と肩を並べるべく富国強兵のもとに鉱工業を積極的に推進したが、その代償として19世紀後半に栃木県の足尾銅山の採掘事業に伴う鉱毒ガスや鉱毒水の排出に起因する渡良瀬川周辺の環境汚染問題が発生した。

さらに、20世紀に入ると第二次世界大戦前後にかけて富山県における「イタイイタイ病」や熊本県の「水俣病」など産業由来の重金属汚染に起因する公害病が発生した。イタイイタイ病は、富山県の神通川下流域にあたる婦負郡婦中町の住民に多発した我が国初の公害病で、原因は鉱山の製錬に伴う未処理排水に含まれていたカドミウム中毒であることが後に判明した。すなわち、鉱山から排出されたカドミウム汚染水は神通川水系を通じて下流の水田土壌に流入・堆積し、農作物のカドミウム汚染に繋がった。被害者は主に産婦人科のある中高年の農家の女性で長年にわたり水田の農作業に従事し、同地域でカドミウムに汚染されたお米、野菜、飲料水を日常的に摂取していた地域住民であった。

一方、水俣病は熊本県の水俣湾沿岸地域の住民に発生した有機水銀中毒で、原因は化学工場から水俣湾に排出されたメチル水銀が海水中で生態系の食物連鎖により生物濃縮を受け魚介類に蓄積し、その汚染した魚介類を日常的に摂取した地域住民が神経症状を主体とした中毒症状を発現した。水俣病については、当初は地元では原因不明の「奇病」と呼ばれ、感染症の可能性が疑われた経緯があり、原因が工場から排出されたメチル水銀であると特定されるまでにはかなりの年月を要した。なお、問題の化学工場は水俣湾に隣接しており、1946年頃から1968年5月頃にかけて、ほぼ20年間にわたりメチル水銀を含む工場排水を無処置のまま直接水俣湾に放出し続けた。その結果、1950年代の初期に同地域に

棲息する猫の「踊り病」や「狂死」が相次ぎ、同様に地域住民においても神経系中毒症状を訴える患者が続出したため、1956年に公式に水俣病として確認され、1968年9月には公害病として政府により認定された。これらの公害病は、いずれも鉱山あるいは化学工場の操業に伴う重金属（銅、カドミウム、水銀）の環境汚染で、地域住民に甚大な損害と健康被害を与える結果となった。我が国は戦後の敗戦復興過程において経済優先を掲げ著しい経済発展を遂げたが、その一方では環境汚染が進み、四大公害病（イタイイタイ病、熊本水俣病、新潟水俣病、大気汚染に起因する四日市・川崎ぜんそく）が発生し多くの国民が苦しめられる結果となった。

この教訓から1980年代以降、我が国は経済優先から環境重視へと徐々に方向転換を図り、環境汚染に対する規制が厳しくなり、現在においては各地で豊かな自然が戻りつつある。21世紀に入り世界の人口は現在75億で2050年までには100億に至る勢いである。特に人口の多い中国においては近年に驚異的な経済成長を成し遂げたが、その陰で都市部においてPM2.5など深刻な大気汚染に悩まされている。

中国政府もやっと環境保全の重要性を認識し、産業界に対する規制を厳しくしているが、回復するまでにはかなりの年月を要すものと推察される。また、世界各地の産業発展と共に温室効果ガスの排出量が増え地球温暖化が進み各地で自然災害が頻繁に起きているが、温室効果ガスの排出規制に関しては、各国の足並みがそろわず、具体的進展に至っていない。

このような状況下の中で我々人類のなすべきことは、経済も重要であるが、地球あつての人類であることを再認識し、地球環境保全を最優先に掲げ、経済発展途上国を含め各国が協力し合って環境保全に取り組むべき時期に来ている。